

「備え」のインセンティブ

面倒を見てくれる家族がいない人が、倒れて意識が消失したり、認知症になったり、亡くなったりしたときに、実際に困るのは誰でしょう。残念ながら本人は、その時は既に「困っている」と認識することができなくなっていることが多くあります。



家族がやるべきと期待されている役割を果たしてくれる家族がいなくても、目の前で支援を必要としている人がいれば、医療・介護の専門職の人たちや行政の職員らは、本来の業務とは離れた職務外・権限外のことを無償で行わざるを得ません。それを「シャドウワーク」と呼び、ケアマネ等の負担が過度に増大していることが問題となっています。

つまり、家族に頼れない「おひとりさま」や「身寄りなし」の問題で、実際に困っていると声を上げるのは、本人よりむしろ事が起こったときに「シャドウワーク」での対応を迫られる病院、介護保険事業所、地域包括支援センター、行政等の周囲の人達なのです。

ここに「おひとりさま問題」「身寄りなし問題」の解決への難しさがあります。当事者の方々が「どうせその時は分からなくなっている」「あとは野となれ山となれ」「最後は誰かが何とかしてくれる」という気持ちのまましていると、当事者が自ら元気なうちに「備え」をしておく行動に結びつかず、その後、何の「備え」もないままに事が起こってしまい、専門職の方々の「シャドウワーク」に頼らざるを得なくなるのです。

その数が例外的なものであるうちは、彼らの善意や福祉への高い意識によって維持していくことができます。しかし今後、家族に頼れない高齢者が急増してくることが明白な状況の中、これまでのやり方が継続するとしたら、医療・介護の現場は崩壊を免れません。

したがって、当事者や当事者予備軍の方々が元気なうちに、ひとりでも多く「備え」をしておくことが必要です。それは、専門職の「シャドウワーク」を減らすことに寄与しますが、決してそのためだけではなく、自分自身の尊厳を最期のその先まで守るためであり、また、自分の世話のことで誰が他の人に迷惑をかけないようにするためだということを周知していかなければなりません。

しかし、今、当事者や当事者予備軍の方々が困っている訳ではないので、よほど意識の高い方々しか、具体的な「備え」という行動を取るところまで結びつかないという現状があります。

そこで最新の議論では、こうした「備え」を元気なうちにしておくことで、行政サービス等で何らかの「インセンティブ（報酬）」が得られる仕組みを用意すべきではないかと言われ始めています。

このコラムの読者の皆様は、「備え」をしておかなければという高い意識をお持ちの方々ですから、どのような「インセンティブ」があれば具体的な「備え」の行動を取りやすいか、ぜひご意見をお寄せください。

つづく